

本展覧会は、「コックリさん」を通して、個人を超えた他者と共有する無意識にアプローチする試みです。これまで、創造性の根源を探るために美術・脳神経科学・文化人類学といったさまざまな分野に渡って研究をしてきました。認知神経科学（脳科学）分野においては、磁気刺激装置を使って言語と描画の関係性を実証しました。また、感覚遮断実験においては、3日間光と音を完全に遮断した部屋の中で過ごし、目の前に青や白の無数の点や幾何学模様が目を追うごとに増していく体験をしました。さらに、ペルーのアマゾン奥地で受けた伝統儀式では、大蛇の柄や渦巻き模様の幻覚が現れ、そしてそれが儀式中に一般的によく見られる形態であることも分かりました。これらの研究を通して、個人の枠を超えた人類共通の無意識の領域があり、何らかの方法によってその領域へアクセスすることができるのではないかと考えました。太古においては、芸術・治療・信仰といった、現代において分断されている事も、全て統合され営まれていたのだといえます。このような視点からコックリさん捉えると、さまざまな分野の橋渡的存在となり得る可能性があると考えました。

### コックリさんの由来（資料1）

コックリさん(狐狗狸さん)は、降霊術や占いの一種として広く知られ、『妖怪玄談』(井上円了著、1887年)には、その由来や科学的な考察などが記されています。1800年代に英国で心霊主義が流行していた時代に、ヨーロッパで流行していた「テーブル・ターニング」を、日本国内の港で外国人がしている姿を見て真似たのが始まりと書かれています。テーブルの脚が不安定であるのが必須で、テーブルがコックリコックリと揺れる姿からその名がついたとされます。ウィジャボード (Ouija-board) はほとんどコックリさんのフォーマットと同じであり、現在もヨーロッパやアメリカでは多くの人が学年期に経験するそうです。

### コックリさん現象の原理（資料2）

コックリさん現象は、認知科学や心理学などの分野において、その原理を解明しようとさまざまな研究がされてきました。例えば、コックリさんを行う二者間の脳波は、十円玉が動く瞬間に同期的活動が見られ、後部帯状回(Posterior cingulate circus)や楔前部(Precuneus)といった、観念の共有に伴う脳部位が活動することがわかっています。その原理においては、①観念運動効果 (ideomotor effective) +②運動主体感の喪失(Loss of Sense of Agency) +③個人の特性などが影響していると考えられています。観念運動効果とは、ある動きを頭の中で想像するだけで、対応する筋肉が無意識に微細な運動を起こすことです。運動主体感の喪失とは、自分が手を動かそうとし

た瞬間と動いたと感じたタイミングのわずかなズレにより、自分の運動が他者や外部の力によるものと錯覚する現象です。さらに、個人の特性においては、ペアを組んだ相手に対する印象や、パーソナリティ傾向テストでスピリチュアルや霊や占いなどに対する信じやすさの高かった者同士の方が、コインが動きやすかったことが報告されています。すなわち、コインを動かしているのは紛れも無い本人であるのに、外側の意思によって動かされた！と感じるとのことです。コックリさんは、個人を超えた他者との無意識領域へアプローチする手法でもあり、現代におけるシャーマンの存在とも言えるのではないのでしょうか。

### 無意識と創造性

無意識の概念は、17世紀頃、ライプニッツが「微小知覚 (petites perceptions)」という、意識に上らない概念領域を考察したことが始まりとされ、その後もカントやショーペンハウアーなどのさまざまな哲学者や科学者によって盛んに研究されてきました。認知科学におけるサブリミナル効果の研究では、意識的に知覚できないほどの短時間の刺激や情報が、人の行動や判断、感情に影響を与えることが実証されています。私たちの行動は、そのほとんどが無意識的に行われ、知らず知らずのうちに操作されているかもしれないということが示されています。心理学分野では、カール・ユングが、フロイトの無意識の概念を独自に発展させ、「個人的無意識」の他に「集合的無意識」という人類に共通する普遍的な無意識の層が、太古から受け継がれ、文化や神話に共通の要素として現れてきたという理論を立てました。彼の考えは、人類の創造性に対する興味深い理論だと思います。

### コックリさんドロ잉

芸術分野では、アンドレ・ブルトン率いるシュルレアリスムが、心理学の手法である自動筆記 (オートマティズム) を取り入れ、理性を超えた無意識による詩や絵画の創作を試みました。また、アメリカ抽象表現主義のジャクソン・ポロックは、アクション・ペインティング (ドリッピング) によって、意識 (筆) を超えた身体運動による絵画を開発しました。本展覧会で行う“コックリさんドロ잉”は、言わば、個人を超えた集合的無意識のアクションペインティングと捉えることができるかもしれません。私たちの思考と行動に影響を与え、世界を形成していく創造性の根源とは何か。コックリさんを通して、参加者の皆様と、意識の深層にある文化的な記憶の囁きを聞く機会となれば幸いです。